

第 35 号…令和6年10月

協会だより



一般社団法人 関東地域づくり協会

3

関東地域づくり協会からのお知らせ

令和6年度 関東ブロック 災害復旧事業技術講習会を開催
 関東地方防災エキスパート活動状況
 関東地方防災エキスパート 情報交換会開催
 関東地域づくり協会で地震防災訓練を実施
 荒川図画コンクール

6

プロジェクトK⑤

**川崎市内に新たな大動脈を！
 都市計画段階の準備に奔走**
 川崎縦貫道路 神奈川県

10

関東の宿場町⑬

日光道中 越ヶ谷宿 埼玉県

12

関東の土木遺産⑳

雄川堰 群馬県

14

会員のひろば

「山」と「ぶらり車中泊の旅」

15

会員情報

お悔やみ
 編集委員会だより

16

ピックアップ 関東の「道の駅」㉔

**災害への備えとにぎわい創出のために
 リニューアルを計画**
 道の駅「奥久慈だいが」

**表紙の言葉**

いりおか あすみ

入岡明日美さん（千葉県千葉市立若松小学校3年（受賞時））

じいじと夕日に向かってジャンプ！

この写真は、当会が主催する第36回「道のある風景写真コンクール」で小学校の部銀賞に選ばれた、千葉市立若松小学校3年（受賞時）の入岡明日美さんの作品です。

「ふくしま県喜多方市にある、恋人坂にじいじと、いとこといっしょに行きました。恋人坂は、じいじがしょうかいしてくれました。夕日がとてもきれいで、道や雲までオレンジ色に見えました。高い所だからこそ見られるぜっけいで、『きれいだね』と言いながら、そのぜっけいに見とれていました。恋人坂にまた来年行って、次はばあばもつれて行ってあげて、このとてもきれいな夕日をいっしょに見に行きたいと思います」

令和6年度 関東ブロック

災害復旧事業技術講習会を開催

令和6年7月19日(金)、当協会および公益財団法人長野県建設技術センターの主催により、赤羽会館講堂(東京都北区)において令和6年度関東ブロック災害復旧事業技術講習会を開催しました。

わが国では、台風や地球温暖化による異常気象により、大規模な風水害、地震や火山噴火等による被害が多数発生しています。公共土木施設は、国土の安全や生命財産を守る重要な施設であり、これらの施設災害は国民の生活や社会経済に重大な影響をもたらします。被災した施設は早急に復旧しなければなりません。本講習会では、災害が起こった場合に、復旧事業の各種申請資料を検討・作成するために必要な災害復旧事業の技術・制度等について理解を深めることを目的に実施しています。

当日は290名の方が受講し、災害復旧事業制度や留意事項などについて、講師の話に真剣に耳を傾けていました。

- 【主催】 一般社団法人 関東地域づくり協会
公益財団法人 長野県建設技術センター
- 【共催】 一般社団法人 建設コンサルタンツ協会 関東支部
一般社団法人 全国測量設計業協会連合会
関東地区協議会・東京地区協議会
一般社団法人 関東地質調査業協会
- 【後援】 国土交通省 関東地方整備局、長野県
公益社団法人 全国防災協会

■講義内容

「災害復旧事業制度の留意点」

白波瀬 卓哉氏 (国土交通省水管理・国土保全局防災課総括災害査定官)

「災害復旧事業採択上のポイント」

上水樽 昌幸氏 (国土交通省水管理・国土保全局防災課災害査定官)

「災害復旧事業における留意事項」

小幡 宏氏 (災害復旧技術専門家)

「令和元年東日本台風における災害復旧助成事業の紹介」

丸山 真氏 (長野県建設部河川課災害係課長補佐兼災害係長)

「関東地方整備局の災害対応」

清水 昌之氏 (国土交通省関東地方整備局災害対策マネジメント室長)



関東地方防災エキスパート活動状況

関東地方防災エキスパートは、関東地方において地震および風水害などの大規模災害発生時または発生の恐れがある場合に、専門的知識と経験を生かして公共土木施設などの被災状況の迅速な収集・通報を行うほか、災害対応に関する支援活動をボランティアとして行っています。平常時は各事務所・自治体等の水防訓練での水防工法の講師や施設点検などにも参加しています。

コロナ禍の影響を受け、防災エキスパート活動も少なくなりましたが、昨年度より徐々に復活。今年度の上半期は、利根川水系連合・総合水防演習や自治体からの水防工法実技指導の依頼など、活動要請が活発になりました。8月末時点で延べ91名に活動していただいています。

- | | |
|------------------------------|-------------|
| ●第72利根川水系連合・総合水防演習関係 | 5月18日他 |
| ●越谷市水防訓練における実技指導 | 5月 9日 |
| ●荒川上流河川事務所洪水対応演習参加助言 | 5月 9日 |
| ●利根川水系砂防事務所土砂災害対応演習助言 | 5月 9日 |
| ●江戸川水防事務所組合水防演習工法講師・解説 | 5月25日 |
| ●筑西市水防訓練における水防工法の指導 | 5月26日 |
| ●利根川栗橋水防事務所組合水防訓練指導 | 6月 2日 |
| ●ものつくり大学水防工法実習指導 | 6月27日 |
| ●京浜河川事務所水防訓練指導 | 7月 3日 |
| ●富士川水防講習会水防工法指導 | 7月24日 |
| ●堤防決壊時緊急対策シミュレーション会議 (11事務所) | 7月 8日～7月30日 |



江戸川水防事務所組合水防演習工法講師・解説



ものつくり大学水防工法実習での指導



富士川水防講習会での工法指導
(甲府河川国道事務所)

関東地方防災エキスパート 情報交換会開催

防災エキスパート活動を効果的に行うため、毎年7～8月頃に関東地方整備局の各事務所主催による情報交換会を実施しています。

今年度の情報交換会は7月12日から8月23日間で33事務所で開催され、8支部の合計で323名の防災エキスパートが参加しました。各地で現場見学も企画されるなど、活発な情報交換が行われました。



常陸河川国道事務所との
情報交換会



荒川下流河川事務所の
現場見学

支部名	主催事務所	開催日	防災EX 参加者数	事務所 出席者数	実施方法等
水戸支部	常陸河川国道	7月25日(木)	18	26	対面
	下館河川	7月24日(水)	7	16	対面
	霞ヶ浦導水工事	7月26日(金)	2	7	対面、現場見学
	常総国道	8月 9日(金)	6	4	対面
宇都宮支部	常陸海浜公園	7月29日(月)	2	6	対面、現場見学
	宇都宮国道	8月 7日(水)	7	10	対面
	日光砂防	7月22日(月)	4	10	対面
	渡良瀬川河川	8月 5日(月)	10	10	対面
高崎支部	鬼怒川ダム統合管理	7月23日(火)	3	13	対面
	高崎河川国道	7月22日(月)	17	18	対面、Web併用
	利根川水系砂防	7月17日(水)	10	21	対面、Web併用、 現場見学
	利根川ダム/品木ダム	7月25日(木)	10	13	対面、現場見学
大宮・千葉支部 (旧)大宮支部	利根川上流河川	7月12日(金)	9	19	対面
	荒川上流河川	7月29日(月)	20	20	対面、現場見学
	大宮国道	7月24日(水)	28	10	対面
	北首都国道	8月 7日(水)	13	7	対面
大宮・千葉支部 (旧)千葉支部	荒川下流河川	7月24日(水)	11	18	対面、現場見学
	霞ヶ浦河川	7月31日(水)	7	17	対面、応援3人含む
	利根川下流河川	8月 5日(月)	7	13	対面、現場見学
	江戸川河川	7月18日(木)	14	21	対面、Web併用
東京支部	首都国道	7月30日(火)	21	10	対面
	千葉国道	7月26日(金)	18	11	対面、Web併用
	関東技術	8月 6日(火)	5	20	対面
	東京国道	8月 8日(木)	8	15	対面
神奈川支部	相武国道	8月23日(金)	7	4	対面、現場見学
	昭和記念公園	7月23日(火)	2	6	対面
	京浜河川	7月29日(月)	10	33	対面、Web併用
	相模川水系広域ダム管理	7月23日(火)	3	5	対面、応援1人含む
甲府支部	川崎国道	7月25日(木)	6	6	対面
	横浜国道	7月26日(金)	8	8	対面
	甲府河川国道	8月 5日(月)	9	12	対面
	富士川砂防	7月26日(金)	8	12	対面
長野支部	長野国道	7月30日(火)	13	6	対面、現場見学

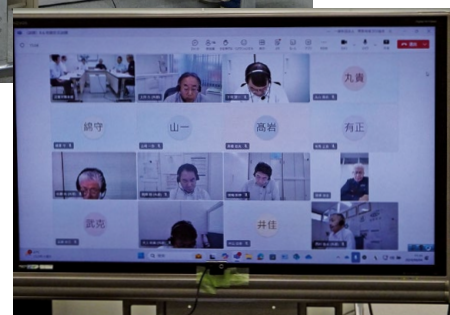
関東地域づくり協会で地震防災訓練を実施

関東地域づくり協会では、9月1日の防災の日に合わせて毎年「地震防災訓練」を行っています。今年は9月4日に、首都直下型地震が発生した想定で訓練を実施しました。

折しも8月8日に「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)」が発表されていたこともあり、協会職員も危機感を持って防災訓練に取り組みました。今年の訓練では職員の安否確認訓練と併せて、同システムの掲示板を活用した情報共有訓練を新たに実施し、職場以外で被災した際もスマートフォンで情報共有ができる仕組みを構築しました。



Teams Meetingを使った
班長会議



【本部長指令第1号】
本部長へ対策本部および
支部設置指令の決裁

河川愛護に関する広報活動 荒川図画コンクール

体育館の床に並べられた
応募作品

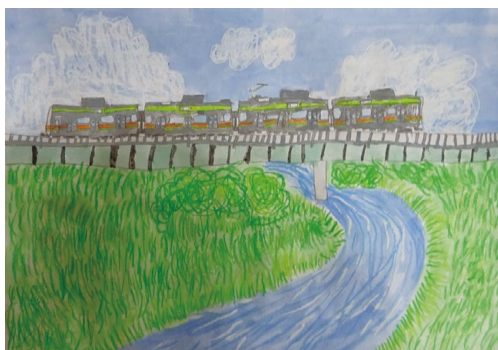


今年で35回目を迎える荒川図画コンクール。河川愛護に関する広報活動の一環として、次世代を担う小学生に荒川の絵を描くことにより河川美化、愛護の意識や関心を高めていただくとともに、その作品を通して多くの流域住民の方に河川愛護や河川への意識を啓発することを目的に実施されています。平成17年から当協会（当時：関東建設弘済会）の公益助成事業となり、平成30年からは当協会も実行委員会へ加わり「関東地域づくり協会賞」も設けられました。

今年の応募数は1,316点。9月27日に開かれた審査会において、特選および当協会を含む実行委員会11団体の各賞がそれぞれ各学年1点選ばれ、その他に入選各学年3点、佳作各学年5点の合計120点の入賞作品が選定されました。

入賞作品は、さいたま市市民活動サポートセンターを皮切りに、計4カ所で順次展示される予定です。

今回「関東地域づくり協会賞」に選ばれた6作品を紹介します。



はつかりばしからみた いるまがわとかわごえせん
荒川結翔さん 川越市立泉小学校1年生



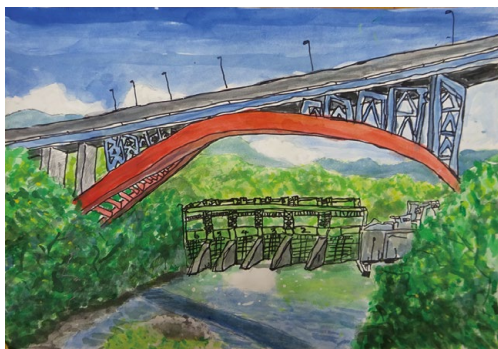
荒川を超えて
横山智子さん さいたま市立木崎小学校4年生



夜キレイな蛍がとんでいた雀川砂防ダム公園
秋元彌花さん ときがわ町立明覚小学校2年生



新河岸川と新河岸川水循環センター
久保壮介さん 和光市立第五小学校5年生



橋の下のダム
金巻壮真さん 滑川町立宮前小学校3年生



三波溪谷
吉田陽莉さん 川越市立川越西小学校6年生

川崎市内に新たな大動脈を！ 都市計画段階の 準備に奔走

川崎縦貫道路 神奈川県



会員の方々に携わったプロジェクトの地を再訪していただき、苦労や喜び、エピソードさらには事業全体の効果などを語っていただく本シリーズ。第51回は、川崎縦貫道路の計画に携わった大槻省吾さん、大日方文博さん、伏見利行さんと現地を訪ねました。



大槻省吾さん

三和エンジニアリング株式会社参与。昭和47年入省、平成17年、関東地方整備局地方事業評価管理官を経て退職。



大日方文博さん

昭和38年入省、平成10年、関東地方整備局特定道路調整官を経て退職。



伏見利行さん

パシフィックコンサルタンツ株式会社首都圏本社営業部技術顧問。昭和61年入省、令和3年、道路部道路計画管理官を経て退職。



①平成12年頃の大師JCTの様子。中央を縦に走るのが川崎縦貫道路(国道409号)、それを横断するのが首都高速道路横羽線だ(提供:川崎国道事務所)

②③川崎縦貫道路の計画について語る3人。後に22年にわたって行われる事業の最初の計画段階だ。「着工前の段取りがとても重要です」と大槻さん(③事業推移は大槻さん作成)



川崎縦貫道路の事業推移

都市計画 住民説明会	都市計画 決定	工事起工式	浮島JCT～ 殿町出入口供用	殿町出入口～ 大師JCT供用	現在	備考
1988/7/	1990/8/	1992/6/	2002/4/	2010/10/	2024/9/	
約 2年						
約 4年						
約 14年						アクアライン開通 1997/12/
約 22年						
約 36年						

川崎市との調整に奔走！ 説明会までに具体的な計画を

昭和63(1988)年7月30日。川崎市内の小学校において、川崎縦貫道路の8回目の住民説明会が行われた。環境への対策や補償について住民からは熱心に質問の手が挙がる。川崎国道事務所は丁寧に説明にあたった。同事務所では7月に入ってから道路建設予定の沿線各地区で地元説明会を行ってきたが、その最後の回だった。

住民への説明に向け、約1年前から準備に奔走したが、当時、調査課長だった大槻省吾さん、調査課付きの建設監督官だった大日方文博さん、調査課で筆頭担当職員だった伏見利行さんである。

川崎縦貫道路は、東京湾横断道路(東京湾アクアライン)と東名高速道路を結び、南北に細長い川崎市内を縦断する幹線道路として昭和61年に事業化された。延長約25kmのうち第I期は、川崎浮島JCT(東京湾岸道路・東京湾アクアラインと接続)から、首都高速道路横羽線と接続する大師JCTを経て、国道15号との交差点に至る約8.4km。川崎市沿岸部には京浜工業地帯が広がるが、当

時、市内には南北方向の幹線道路がなく、慢性的な市街地の渋滞が問題になっていた。

「川崎縦貫道路はそもそも、東京湾アクアラインを川崎市の浮島で受け入れるための条件として、川崎市から国へ要望されたものでした。木更津市から川崎市側へとただ道路をつなげても交通量が増加してさらに渋滞を招くだけからです。まず、アクアラインに接続する川崎縦貫道路と東京湾岸道路の整備をしてほしいという要望に応じて事業化されたのです」

大槻さんは計画の経緯をそう説明する。

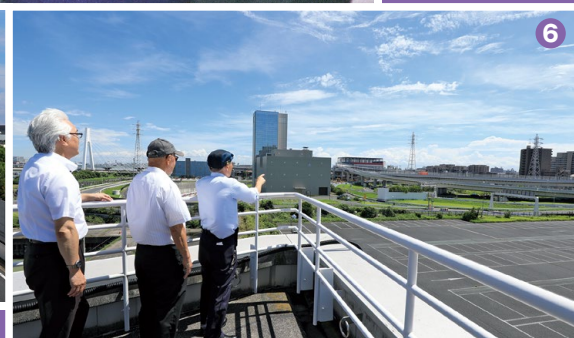
地元説明会にこぎつける前に川崎市との調整を行ったが、それは非常に難航した。議会には特別委員会も設置された。川崎市から最初に言われたのは「アクアラインが開通するまでに、接続する縦貫道路と湾岸道路を完成させてほしい」ということだったが、都市計画決定は住民説明会から約2年後の平成元年8月。アクアラインが開通したのは平成9年12月、川崎浮島JCTから大師JCTまでが供用したのは平成22年だった。「住民説明会を行ってから約22年かかってやっと、首都高速道路横羽線につながったのです」と大槻さんは計画の壮大さを語る。



④ 3人が携わったのは最初の都市計画のための住民説明会。昭和63年7月に、8回にわたって開催した。要望を聞き、ルートや施工方法の検討などを行い、そのとき可能なかぎりの計画を練って、3人ともに説明会に臨んだと振り返る
(提供:川崎国道事務所)



⑤ 殿町地区から浮島方面の自動車専用部は高架構造になる



⑥ 川崎縦貫道路と首都高速道路横羽線が接続する大師JCTを望む



⑦ 殿町地区から大師JCTまでの自動車専用部は地下道路に。「小学校(右奥の建物)前は通学路。安全と、排気ガス・騒音の抑制のためにも地下にするのがよいと考えたのです」(伏見さん)

ルートの選定から公害への対策まで 住民に納得してもらえる道づくり

川崎縦貫道路は現在、川崎浮島JCTから大師JCTまでが完成している。川崎浮島JCTから工場が立ち並ぶ地区を抜けて殿町に至るまでは、一般部(国道409号)の上に、ラケット型の橋脚で支持するダブルデッキ構造の自動車専用部が走る。住宅地である殿町付近では、地下に向かう自動車専用部が中央を通り、一般部は両脇に20mずつ環境施設帯を設け、幅約50mのゆったりした道路になっている。殿町から大師JCTまでの自動車専用部はダブルデッキのまま地下構造になる。大師JCTから国道15号までの区間は、現在調査中である。

現行のルートに決まるまでも、一筋縄ではいかなかった。川崎市から要望されたルートの候補は、4つあった。1案は現行の、国道409号を改修して浮島方面まで延長するルート。2案は、横浜寄りを通る国道132号のルート。3案は多摩川の河川敷ルートで、堤防に高架道路を造るというもの。4案は、多摩川の河床にシールドで通すルート。これら全てのルートについて、大日方さんや伏見さん、調査課の皆で概略を設計しながら、どれくらいの工事費がかかるのか、支障物件はあるか、何か問題点はあるか、工期はどのくらいかを洗い出さなければならなかった。

2案と4案は、実現可能ではあったが、1案に比べると、非常に支障物件が多かったり、事業費や工期がかかり過

ぎたりと、現実的ではなかった。多摩川に関係する3案と4案については、大槻さんは、管理している京浜河川事務所にも相談したそうだ。結果、シールドで河床を通すのは構わないが、堤防に高架で自動車専用部を造るのは難しいという解答だった。

「川は、両側の堤防がほぼ同じ強度でないと洪水が来たときに危険だ、片側だけをがちがちに固めてしまうのは認め難いということでした。それは確かにそうです。市からは、当時、荒川と中川の間の堤防に首都高速道路が造られたことから『同じようにできないか』と言われたのですが、あれは中堤であり多摩川兩岸の堤防とは違うのだといくら説明してもなかなか分かってもらえませんでした。これは後の説明会でも、河川管理上できないのだと何度も説明することになりました」(大槻さん)

自動車専用部を全線地下化してほしいという要望もあったが、これも当時の道路計画の原則や用地の問題から難しかった。

「海寄りの工業地帯では用地買収ができず、現道の幅しかありません。そこに高架でルートを通し、なおかつダブルデッキにすることで、道幅のなさをカバーするしかなかったのです」(大日方さん)

「川崎大師付近の住宅地帯も、既に道の両側にマンションがあって、両脇を広げることはできませんでしたし、そこから大師JCTにコンパクトにつなげるためには地下部分もダブルデッキにするのが一番効率的でした」(伏見さん)



⑧ 浮島地区を横切る多摩運河に架かる浮島橋の架替え工事の様子
(提供:川崎国道事務所)



⑩ 平成8年頃、浮島地区から川崎駅方面を望む
(提供:川崎国道事務所)



⑨ 浮島地区の自動車専用部(高速川崎縦貫線)はラケット構造の橋脚で上下に分けた

⑪ 現地の調査や市との打ち合わせの帰りに訪れた、思い出の川崎大師にて



昭和63年頃は、各地で公害問題が厳しく問われていた時期。「地元は相当ビリピリした雰囲気だったと記憶しています」と大日方さん。主に問題とされたのは、騒音と振動、そして大気汚染だ。騒音は遮音壁を造るあるいは半地下にすれば環境基準を満たすことができ、振動も構造的な問題で解消できる。大気汚染は、大師JCT付近に換気塔を設け、二酸化窒素などを除去して煙突から拡散すると説明した。今では、自動車のエンジン自体が改良され、ハイブリッドカーや電気自動車の普及により、道路の大気汚染は大幅に改善された。当時はもちろん予測できなかったこと。そのときにできる限りの検討を行って計画したのである。

最初の計画が大きな意味を持つ、都市部の道路建設

伏見さんは昭和61年3月に大学を卒業して着任したばかり、初めての職場だった。

「ダブルデッキの上下どちらを浮島方面に向かう方にするかを考えたのが面白かったですね。地下から地上へ出るときは上り坂になりますが、上り勾配の方がより排気ガスが多く出ます。地域への影響を少なくするためには、浮島方面に向かう方を下にするのがいいだろうと、皆で相談して決めたのです」(伏見さん)

大日方さんは、川崎国道事務所に来る前は長野や群馬で山岳道路の計画を手掛けていた。川崎縦貫道路は、工業地帯や住宅地など市街地に道路を建設することの難

しさを改めて実感したという。課長だった大槻さんの様子を思い返して「大槻さんは本省から川崎市、議会や地元と、一手に引き受けてあちらこちらへ動き回っていたので、大変だったと思いますよ」と苦笑いする。夜遅くまで仕事は続き、二人で溝の口駅前の飲み屋で杯を交わしながら「明日もまた頑張ろう」と活力を奮い起こした。

「あちらこちらから言われることをすぐさま図面にしてくれたのが大日方さんと伏見さん。とても頼りにしていました」と大槻さん。今でも鮮明に思い出すのは、市議会特別委員会での説明の場面だ。

「議員の皆さんからの質問が延々と続き時間もどんどん過ぎていく中、『一人でも反対する人がいたらどうするのか』という質問が何度も出されました。最後には、事務所長が『大勢の方が協力している中で、誰が聞いても理不尽と思われる反対の場合は断固実施する』と返したので。それで特別委員会も『分かりました』と。それでようやく説明会にこぎつけることができたのです。また、その説明会開催にあたっては川崎市および首都高速道路公団の皆様には大変お世話になりました。特に川崎市のK主幹には町内会長を訪ねる際には一緒に行き、何度も膝詰め談判をしました」(大槻さん)

人々の期待を背負いながら、技術者として実現可能な方法を探り、また次の技術者がこのような大きな道路を何十年とかけて造っていく。その先に完成した道路は今、街の新しい大動脈となっている。



徳川家康ゆかりの地 越ヶ谷宿

江戸時代、東海道などの街道に設けられたのが宿場です。
旅人を迎え送り出した宿場の古今の様子を

関東地方の各地に訪ねるシリーズ。

第15回は日光道中3番目の宿、越ヶ谷宿です。



徳川家康も宿泊した大聖寺



歌川広重が描いた富士三十六景 武蔵越かや荘
(提供:国立国会図書館デジタルコレクション)

日光道中の要所として整備される

日光道中は、江戸と日光とを結ぶ約140kmの街道です。宇都宮から分かれる奥州街道とも道を同じくしており、参勤交代による大名行列が盛んでした。越ヶ谷宿は江戸から数えて3番目、荒川(現在の元荒川)を挟んだ越ヶ谷町と大沢町の2つの町を中心として構成された宿場町で、交通の要衝として栄えました。2つの町の家並みはともに“街道に対し直角に屋敷割が施されている”、“間口が狭く奥行きの長い”といった特徴を持ち、人工的に整備された様子がうかがえます。町並みの長さは合計で18町47間(約2km)。人口は天保14(1843)年時点で4,603人ほどで、総家数は1,005軒を超える大きな宿場でした。

珍しい「合宿」形態とその機能

越ヶ谷宿の大きな特徴として、中心となる町が2カ所存在する「合宿」のシステムが挙げられます。越ヶ谷宿を構成する越ヶ谷町と大沢町は、それぞれ独自の機能を持っていました。純粋な宿場としての役割を担っていたのが大沢町です。当時越ヶ谷宿に存在した大小52軒ほどの旅籠のほとんどは、大沢町にあったといわれています。大名や幕府の役人の泊まる本陣も、元々は越ヶ谷町の会田八右衛門家が代々務

めていましたが、天明元(1781)年からは大沢町の福井権右衛門家にその役割が受け継がれました。また飯盛女と呼ばれる女性たちが旅客に対し特殊な接待をしていた「飯盛旅籠」も大沢町には多く存在し、文化年間(1804年～1818年)には旅籠が22軒、100人を超える飯盛女が宿場を賑わせました。

越ヶ谷町が担っていたのが商業的な機能です。資料によると、文禄年間(1592年～1596年)の頃からすでに毎月2日と7日に六斎市が開かれており、その後も活発に商品交易が行われる商業地区として発展していきました。大沢町にある本陣や旅籠は後の大火によってほとんど失われましたが、越ヶ谷町の旧日光道中には、はかり屋や塗師屋(小泉市右衛門宅)、木下半助商店など、古くからこの地で商業を続けてきた商店が今もなお当時のまに残っており、歴史の息吹を感じることができます。

天下人も愛した越ヶ谷

越ヶ谷宿を語る上で忘れてはいけないのが、徳川家康との関係です。天正18(1590)年の関東移封直後、家康は周辺諸大名の動向を探知し、同時に関東の地形を熟知するため、そして何より領内の民心を把握するため、鷹狩の名目で各地を巡察しました。越ヶ谷市相模町に本堂を構える大



古民家をリノベーションした観光スポットも(はかり屋)



古民家をリノベーションした靴屋



歴史の面影を家屋に残す会田金物店



塗師屋(小泉市右衛門宅)。現在も人が住んでいる



越ヶ谷町と大沢町とを結ぶ大沢橋

聖寺は、巡察中の家康が宿泊したとされるお寺です。天下分け目の決戦として知られる関ヶ原の戦いに赴く前にも、大聖寺で戦勝祈願をしたといわれています。

家康が関東巡察時に利用した宿泊施設は、後に“御殿”“御茶屋”と呼ばれるようになりました。慶長9(1604)年、將軍家康は埼玉郡増林村に設置していた御茶屋を越ヶ谷の東町裏耕地に移します。移された御茶屋は名を越ヶ谷御殿と改められ、この土地における安息の地となりました。

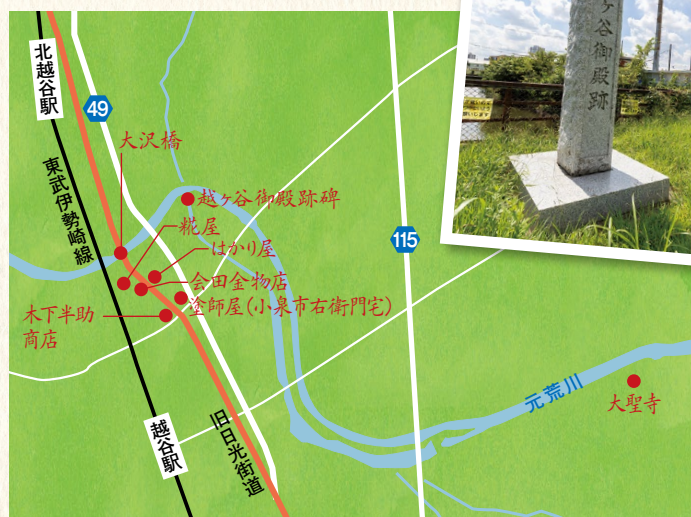
当時の越ヶ谷には鶴や鴨が数多く生息しており、家康はしばしば鷹狩を行ったと伝えられています。特に慶長18(1613)年の9月から12月にかけては3度も越ヶ谷御殿を訪れており、その際には近郊に住む農民から代官の悪事を訴えられ、家康が直々に裁判を行ったという逸話も残っています。また元和元(1615)年の11月に越ヶ谷を訪れた際には、狩り場である田に水が満ちており、鷹狩ができませんでした。怒った家康は土地の代官を叱責し、厳しい処分を下したそうです。この時の来訪が、家康が越ヶ谷で過ごした最後の時間となりました。

家康の没後、2代將軍秀忠も、阿部正次など幕閣の家臣たちを連れて越ヶ谷を訪れました。彼らは半月以上もの長期間、鷹狩や茶の湯を楽しんだといわれています。越ヶ谷は徳川政権中枢に、保養地として愛されたのでした。



国の登録有形文化財、木下半助商店

元荒川沿いにひっそりと佇む
越ヶ谷御殿跡の石碑



明治以前に 漏水のない水路網を整備する

雄川堰と呼ばれる古くからの用水路は群馬県甘楽町小幡にあります。小幡は豪族小幡氏^{おぼた}が本拠にしていた地区です。その後、戦国時代の25年間には5度も城主が変わり、落ち着いたのは徳川家康が幕藩体制を成立させた後。家康は織田信長の次男信雄に大和三万石と小幡二万石を与えました。元和元（1615）年のことです。信雄は大和に赴き、小幡の経営は子の信良に任せました。陣屋は現在の甘楽町福島に置き、以後織田氏による小幡藩が続きます。寛永19（1642）年に陣屋は小幡に移転します。移転の理由は幾つかありますが、その一つとして挙げられているのが、雄川堰による豊かな用水の存在でした。

雄川堰がいつ完成したのかは不明ですが、藩政以前から存在していたと考えられています。昭和18（1943）年にできた雄川堰用水取入口改修工事記念碑には「雄川堰ハ上古人創立スル所ト伝フ」と刻まれています。その「古雄川堰」が陣屋の小幡移転時や幕末に行われた改修工事に

より現在の姿になりました。

玉石構造（空石積み）による雄川堰は今でも現役の用水路として活躍しており、これが土木遺産選定の理由となりました。それにしても土木技術が未発達時代に、これだけの用水路を完成させ400年以上にわたり保存、活用してきた人々の知恵と努力は、それだけで選奨土木遺産に値するといえるでしょう。

雄川堰は雄川から取水し小幡地区を南北に流れる大堰と、大堰から3つの取水口を使って取水する小堰から成ります。全長約9kmで、小堰の総延長は6,109m。その内約6割は蓋のない開渠区間となっています。

小堰の水路幅は30～50cmですが、建設にあたっては幅2.5m、深さ1.5mを掘削し、その上で堰の3面を「かね」と呼ばれる粘土に石灰を混ぜた土で、それぞれ約1m突き固めています。さらに石積みを行い土の表面が水で洗われなようにしたのです。こうした施工により、漏水のない水路が完成し長期に保存され、地域社会や暮らしに貢献してきたのでした。



関東の土木遺産 第52回

400年以上にわたり
きれいな水を運び続ける

雄川堰

群馬県

土木学会では現存する貴重な土木構造物を調査し、「日本の近代土木遺産」として発表しています。



それらの土木遺産の中でも特に価値があるとされる選奨土木遺産。第52回は群馬県甘楽郡甘楽町にある雄川堰（用水路）です。



雄川からの取水口。左が雄川堰、右が雄川

桜並木の下を流れる大堰
(提供:甘楽町建設課)



吹上の石樋で
堀沢川をまたぐ雄川堰



人々の暮らしにさまざまに貢献する

大堰は雄川の上流、大手門跡より約2.3kmの大口に取水口が設けられています。ここからスタートして途中吹上の石樋を通過。やがて二手に分かれ、また合流し小幡地区を貫流します。途中にあるのが小堰への3カ所の取水口です。上流から一番口（一升杓の大きさ）、二番口（五合杓の大きさ）、三番口（三合杓の大きさ）と呼ばれ、かつて208軒の武家屋敷があったとされる地区へ、飲料水や生活用水として雄川の水を行き渡らせたのでした。今に残る松浦氏、高橋氏の武家屋敷や国指定名勝楽山園の池も小堰の水を利用しています。

小幡には武家屋敷地区以外に、もう一つの地区がありました。養蚕農家などが集まっていた町屋地区です。大堰が中央を流れ、人々は飲料水の他にもさまざまにその流れを利用してきました。地区の産業で盛んだったのは養蚕です。蚕を飼育する竹製の「蚕かご」などの養蚕道具を洗うのは大変な重労働だったといわれますが、大堰に設け

られた洗い場のおかげでその負担は減りました。洗い場は現在でも41カ所あり、農作物の洗い場として活用されています。他にも畑作などで使用した鍬などの道具の洗浄や、堰の水を汲んで鎌を研ぐなど、生活用水としての利用は現在でも活発に行われています。雄川堰はまた、下流の水田の灌漑用水としても利用されてきました。地域の稲作が発展してきたのも、雄川堰があればこそでした。

このように地域にとって重要な存在であった雄川堰を守るため、昔からさまざまな取り組みが行われてきました。藩政時代には御用水奉行を置いて管理に力を入れました。明治に入ってからでは地区ごとに「水守り」の係を決めています。戦後は生活排水などにより水質悪化した時期もありましたが、下水道の整備や地元住民による清掃活動などにより、現在の美しい姿を取り戻しました。

小幡地区の歴史的風致の中心となる雄川堰は土木的、歴史的、景観的に高く評価されており、選奨土木遺産の他にも名水百選、水の郷百選、疎水百選、世界かんがい施設遺産に選定されています。



旧小幡藩武家屋敷松浦氏屋敷



国指定名勝楽山園



小堰への一番口（上）
小堰への二番口（右）



雄川堰で養蚕道具を洗う（昭和62年）
（提供：甘楽町建設課）





このページは
会員の皆さまの
投稿によるページです

H19.10.10 浅間山火口。
亜硫酸ガスのためガスマスク着用



山嫌いから山好きに

新潟県の山奥で育った私は、山が大嫌いな砂防屋で、趣味は「暴飲暴食」という不健康な生活をしていました。

本局の砂防係長時代に、利根川源流調査で大水上山(1,834m)登山に誘われて、嫌々参加しました。前日の深酒で喉が渇き持参の水を飲み干し、期待の三角雪渓からの水の補給もできず、避難小屋の雨水タンクの水を飲むしかない、最悪の初登山でした。

平成16年9月の浅間山(2,568m)中規模噴火を調査課長で経験、その3年後には業務命令で山頂火口の調査登山へ。やはり前日の懇親会での深酒と基礎体力不足から全身がつらく、翌日以降は筋肉痛でロボット歩きとなるなど、さらに山嫌いとなりました。

そんなある日、災害対応で心身ともにヘロヘロ状態の私の姿を見た知人が、気分転換に秋の尾瀬ヶ原20kmのハイキングを企画してくれました。

心地よい運動と大自然の絶景を満喫し、昼食のカップ麺とおにぎりの味は格別でした。それまで激しい肩こりや腰痛、不眠などの症状に悩まされてい

たのが、不思議と解消していきました。

それ以降、毎週自宅周辺の「ぐんま百名山」に挑戦し、次第に「日本百名山」を目指すようになりました。

そんな経緯から趣味が「暴飲暴食+山」に変化していきました(笑)。

基礎体力づくり

平日の通勤時間を活用し、効率的な筋トレに努めました。平成20年から6年間、本局に通勤していた際には、片足1kgの重りを付けて大宮駅から本局16階・18階まで歩くのを日課としました。足の重りと階段歩き、ウォーキング2万歩などは今も継続中です。

この結果、筋力と心肺機能が強化され登山も楽になり、山を走る楽しみすら覚えるようになり、何度かトレラン大会にも参加しました。中でも足利市のトレラン大会は、参加賞の米5kgをスタートからゴールまで背負って走る奇想天外のルールで楽しめました。

登山の楽しみ

美しい景色、可憐な高山植物、山での飲食、登頂の達成感など、登山には多様な楽しみがあります。私の場合はこれらにプラスして「飲んだら登る、登ったら飲む」が最大の楽しみです。

平日の暴飲暴食で蓄積した高カロリーを、週末のハード登山で消費することにより、食事制限なしでスリムに変化していく姿には驚きました。

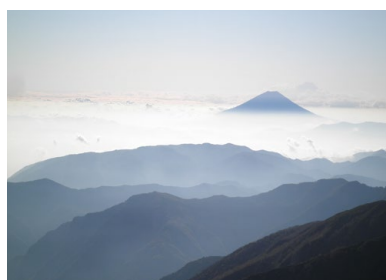
そんな私の登山スタイルを見て、酒好きでポッチャリ系の知人の弟子入りが相次ぎ、師匠役は大変でしたが今では

「山」と 「ぶらり車中泊の旅」



鶴巻和芳

国土防災技術株式会社関東支社参与
元河川部河川保全管理官



H23.10.09 南アルプス北岳。
雲海に浮かぶ富士山の絶景

H24.8.04 北アルプス白馬岳の大雪渓。
夏は涼しい大雪渓が恋しい季節!



15

ピックアップ

第29回

関東の道の駅

災害への備えとにぎわい創出のためにリニューアルを計画



道の駅「奥久慈だいていご」



久慈川沿い国道118号に面した道の駅「奥久慈だいていご」

令和3(2021)年、全国で39駅が広域的な防災拠点となる「防災道の駅」として指定されました。道の駅「奥久慈だいていご」は開業から27年。防災拠点としての機能を高めるとともに街のにぎわいを創出するために、新たな施設を建設予定です。

浸水被害をきっかけに防災意識が高まる

茨城県の最北西部に位置する大子町は面積の8割が山岳地であり、中心を清流・久慈川が縦断しています。奥久慈地方とも呼ばれ、奥久慈渓谷や日本三大名瀑の一つに数えられる「袋田の滝」など自然の観光資源が豊富にあり、年間約50万人が訪れます。また大子町は江戸時代からコンニャクの生産で知られ、現在も米や茶、リンゴなどと並ぶ特産品となっています。

久慈川に沿って走る国道118号に面する道の駅「奥久慈だいていご」は、観光のために東京・埼玉・神奈川・千葉などの南関東からやってくる人、あるいは福島県内から日光などへ出かける人でにぎわいます。特に週末は、駐車場が常に満車になるほど。手狭になった施設を拡充するためにも、「防災道の駅」としてのリニューアルが計画されています。

「令和元年東日本台風で、道の駅の目の前を流れる久慈川が氾濫し、当時、対岸にあった町庁舎が浸水被害に遭いました。これを契機に、大子町では『防災力のあるまちづくり』『にぎわいのあるまちづくり』『町内外との連携によるまちづくり』を3つの柱に、町中心市街地周辺の整備を進めていくことになったのです」と、道の駅駅長の谷部裕さんは

話します。

久慈川緊急治水対策プロジェクトによる堤防の嵩上げと国道461号の嵩上げを同時に進め、移転した庁舎の跡地に新たな道の駅施設を建設し、広域的な防災拠点として活用できるようにする計画です。

若い人の就業場所としても期待

新たに建設される施設には駐車場や緊急道路、旧庁舎内にあったコミュニティFMステーションなども備えることとなります。そこに、大手アウトドアメーカーの店舗も誘致する予定。大子町の主な産業は観光と農林業ですが、ほかに就業できる場所が少ないため、近年は若年人口の減少とともに高齢化が加速しています。大子町で生まれ育った谷部駅長は、「新たな施設は若い人の就業場所にもなるはず」と期待を寄せています。

「大子町は幸い地盤が固く地震には強い土地ですが、久慈川は数十年に一度程度、浸水被害が起こることがあります。災害時の避難場所などとして整備するとともに、町民が集ってイベントを開催することができ、観光などに訪れた人と交流が生まれる場所になれば」(谷部駅長)

令和7年度に着工、令和8年度に完成の予定です。

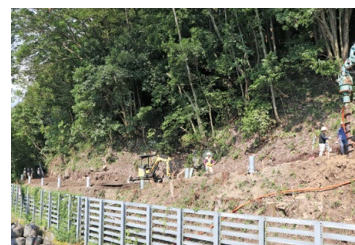


20代30代に受け継がれている農家も多く、直売所にはリンゴや米をはじめ、地域の野菜や加工品が並ぶ。特に特産のコンニャクは種類豊富

「奥久慈だいていご」の谷部裕駅長



現在の道の駅施設は土砂災害特別警戒区域にあり、裏手の山の斜面の擁壁整備を行っている



久慈川支川の押川(左)に面して立っていた町庁舎(左の橋後方、茶色い建物)。現在は移転済で跡地の整備が進められている



現在の施設2階には源泉からパイプで引いてきている温泉も。観光帰りの人や長距離トラックドライバーなどに利用されている

